

第21回ハーレム国際野球大会に参加して

川村 卓

A Report on "21e Haalemse Honkbal Week"

Takashi KAWAMURA

野球は現在、2008年北京五輪の種目に残ることができるかどうかで議論が行われている。これは野球が行われている国数が少なく(2003年現在112ヶ国)、五輪種目としてはふさわしくないという理由付けである。確かに野球が盛んなのは北米、中米、アジアの各国でヨーロッパではあまり人気がない。ただ、日本、米国、キューバといった人気のある国での位置付けは凄まじいものがあり、国民的スポーツとして隆盛を極めていいる。つまり、野球の行われている国は少ないものの、野球人口としては世界全体を見ると非常に多いのである。

野球が盛んな国は小数だが、行っている国では国民的スポーツと呼ばれるほど人気を博してしまふ矛盾はどこからくるのであろうか。いつか調べることができないかと思っていたところ、今回オランダで行われた第21回ハーレム国際野球大会の日本代表コーチとして行かせていただく機会を得た(7/15-29)。そこで、オランダ一国ではあるが、ヨーロッパで行われている野球の現状と世界の野球レベルについて感じたことをまとめてみたい。

HONKBAL

現地時間7月15日にオランダ・スキポール空港に降り立った。7月の気候は日本に比べかなり涼しく、北海道に似ている。今回会場となるハーレム市は空港からバスで15分ほどにある。ハーレム市は首都アムステルダムの西に隣接する都市で、人口は10万人ほど、落ち着いた雰囲気のある街であった。ちなみにニューヨークにあるハーレムという地名はこの地に住んでいた人たちが移り住んだことに由来している。このハーレム国際野球大会は隔年の開催であり、今年は21回目である。参加国はアメリカ、キューバ、南アフリカ、台湾、日本、そして開催国のオランダである。

日本野球連盟はこの大会を数少ないアマチ

ュア野球の世界大会と位置付け、インターコンチネンタル杯と並んで、アマチュアの日本代表チームとして数多く出場してきた。前回の大会より学生の代表を送りこんで、若い世代に国際大会出場のを増やそうとしたねらいが窺える。

こちらでは“Haalemse Honkbal Week”として、街中でポスターが見られて歓迎ムードが漂っていた。オランダでは「野球」のことを“Honkbal”と言うそうで、大都市ロッテルダムでも同じような世界野球大会が開かれており、ハーレム大会がない年に行われている。

オランダで初めて野球が行われたのがここハーレムらしく、その記念もあって、このような世界大会が行われるようになったそうだ。



街に貼られたポスター

日本はまだ遠い国？

さて、我々日本チームは時差の修正と選抜チームとしての練習を多く重ねるため大会3日前に宿舎に入った。練習場は近くのスポーツ・クラブで、広大な敷地の中にサッカー場3面、野球場、ソフトボール場、ホッケー場、屋内体育館、屋内プールなどが総合的に配置された施設で行った。屋外施設のどれを取っても緑の芝がきれいに整えられ、ヨーロッパのスポーツ・クラブ文化に触れたような気がしたものである。また、オランダの英語表記である「ネーデル・ランド」は「低い土地」という意味であるが、練習場沿いの運河はどう見てもグランドより高い位置に水面があった。そして、私たちの目線の上をヨットが優雅に走り抜けて行く姿を見ると、実に不思議な感じがしたものだ。

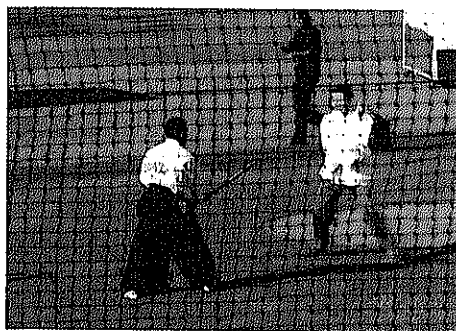
滞在2日目は地元オランダと練習試合を行った。オランダ・チームはこの大会に向けて長期の合宿に入っていたようで、意気込みも

十分なものであった。オランダの4番打者は日本プロ野球球団・ヤクルトにいたことのあるヘンスリー・ミューレンである。彼はカリブ海の島出身だが、そこがオランダ領のためにこのナショナル・チームに選ばれたと流暢な日本語で話していた。

日本チームは外に広いストライク・ゾーンと手足の長いオランダ人投手が投じる、やや出所が遅れて見えるボールにてこずっていた。これらの対策をどう行うかが、勝敗のカギだと感じられた。翌日、日本チームは南アフリカ代表とも試合を行い、チームとしてのまとまりを作って本番に臨んだ。

大会初日の開会式はとても華やかなものだった。観衆は超満員の約5000人で球場外の露店も大賑わいであった。式では元ロサンゼルス・ドジャースの会長ピーター・オマリー氏が登場して始球式を行うなどのパフォーマンスがあった。中でも、球場内で出場各国をその国の文化とともに紹介した見世物があり、キューバはラテンのリズムで陽気に楽器を演奏し、南アフリカは民族音楽、台湾は日本という獅子舞によく似た踊りが披露され、アメリカはヒップホップの音楽と華やかな紹介がされるていた。そして、最後の日本はどのような紹介がされるのかと期待していた。

「ヤボン」と大きな声で紹介された後に出てきたのは、木刀とヌンチャクを持った2人が尺八の奏でる音色の中闘うといったものだった。



日本の紹介。木刀とヌンチャク？

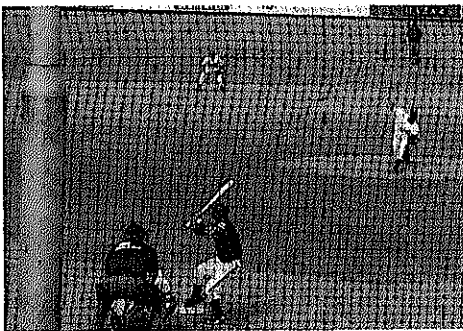


日本代表コーチ陣

観衆は大いに沸いていたものの、木刀はまだしも、ヌンチャクはどうかと首を傾げてしまった。日本はまだまだ遠い国なのかと思わせる一幕であった。

熱戦譜

日本の初戦は王者・キューバであった。キューバは26歳以下のナショナル・チームでこの大会に臨んでいた。前半、中盤と息が詰まるような投手戦を繰り広げ、0-0のまま6回を終えたのだが、7、8回とキューバ打線に長打を浴びて5-0で負けてしまった。キューバは金属製から木製バットに移ったことで、以前のような破壊力のある打線ではなかったが、要所の集中力には目を見張るものを感じた。事実、キューバ・チームでは成績を残さない即メンバーが入れ替わってしまうという厳しさと、彼らの一打席、一球にかける集中力は凄みを感じた。また、日本の速



対キューバ戦

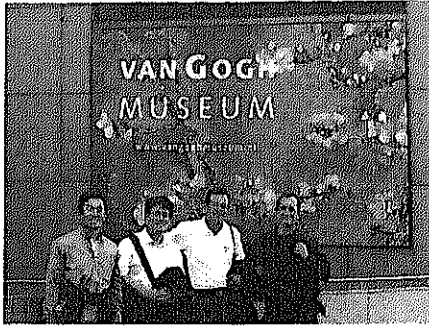
球投手が投じるような、きれいなバックスピがかかったボールは140km/hを超えていても全く通用しないことが分かった。

次の相手は地元オランダである。オランダ戦は全土にテレビ中継され、スタンドの観衆もあふれんばかりに膨れ上がった。

近年、オランダの実力は上がっているようで結局、3-2で負けてしまった。日本チームは手痛いところでエラーを重ねてしまったのが大きな敗因である。加えて、多少審判の有利、不利があったにしても、日本チームは貧打に泣いている。ボール自体が少々重く、捉えたと思ってもあまり飛距離がでないようだ。また、日本ではあまり見られない回転が不規則な速球、ツーシームなどのムービング・ファスト・ボールが微妙に打者のタイミングを狂わしているようであった。いずれにしても開幕2連敗、学生代表といっても言い訳できない成績にチームは少し沈んだ雰囲気になった。

中止後に

3戦目はアメリカである。この沈んだ雰囲気強国アメリカと闘うのはいささか気後れしてしまうのではないかと不安になった。アメリカも学生の代表で、日米大学野球のメンバーが集結している。実はこの大会後、イタリアで第1回世界大学野球選手権大会が開かれる予定で、その前哨戦としてアメリカ・チームは参加していた。このチームのメンバー全てがメジャー・リーグにドラフトされる予定と聞き、我々は奮い立った。しかし、その日は終日雨であった。日本でこのような天気ならば、即刻中止の宣言がなされるのだが、こちらでは可能な限り試合時間を遅らせる。観客も一行に帰らず、むしろ雨の中音楽をかけながら楽しんでいるようであった。2時間待った挙句、中止の宣言がなされた。それを聞いたアメリカ・チーム選手数人がベース一周をして、ホームに水しぶきを上げながらの



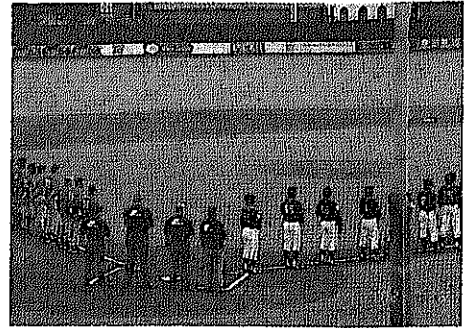
ゴッホ・ミュージアムの前で

ヘッド・スライディングを披露して観客を大いに沸かせた。そこで日本も負けじと数人が同様のスライディングを見せ、その後、両チーム乱れてのダンス大会となってしまった。最後にはメジャー・リーガーの卵たちと記念撮影までして、選手たちには大変よい思い出となったに違いない。考えれば、自分と同じ年頃の選手たちである。気後れすることなどなく、普段どおりの野球ができればよいのではないかというある種、開き直りがチーム内ででき、今後の戦いにおいてもよい交流であったと感じた。

4戦目は台湾である。アジアでは日本、韓国とともに強豪国と言われる台湾であるが、今回のチームも台湾代表の選手が5名ほど入っておりその実力のほどが知られている。結局、11-2で完敗してしまった。台湾選手はどれもアジアの選手とは思えないほど体格が良い。少々、打撃や守備は荒いものそこからはじき出される打球のスピードは決してアメリカ、キューバに劣っていない。日本チームより国際大会に向いていると感じられた。

それにしても、日本チームは相変わらず打てない。筑波大学からは本学でも4番を打つ林泰盛一塁手(体専4年)が常時クリーン・アップとして出場していたが、なかなか結果を出すことができない。また、重廣祐二投手(体専2年)も調整不足で実力が出てこない。

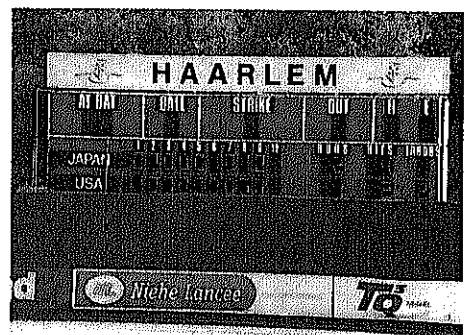
全体的に国際大会特有のストライク・ゾー



対アメリカ試合前、国家斉唱

ンや投手の異なる球質に慣れずにいる。しかし、国際大会の経験がほとんどない学生チームとしては1戦ごとに学んでいくしかない。事実、対戦するごとに結果は出ていないが、内容は良くなっていると首脳陣では感じていた。

中止となっていたアメリカ戦が台湾戦後に行われることとなった。先発投手にこの大会で調子の良い左投手を当てたが、この采配が当たった。この投手の球速は135km/hぐらいなのだが、低目へのコントロールが良く、特に打者の手もとで曲がるスライダーやスクリーン・ボールを得意としていた。日本投手のボールに対して、アメリカ・チームの打者は完全にタイミングを狂わされていた。また、ノーアウト1、3塁で3塁への帰塁が緩慢な走者に対して、捕手が矢のようなけん制でアウトを取った。このように、随所に細やかな



対アメリカ勝利のスコアボード



楽しむオランダの観客

日本らしいプレイが出て、最強と思われていたアメリカを2-1で破ることができたのだった。

試合終了後、スタンドに向かって手を掲げる私たちに、満員の観衆はスタンディング・オベーションで称えてくれた。フィールドまで人があふれ、選手や我々にサインを求める子供たちで人だかりができていた。ドイツから日本を応援しに来たという在外駐留の邦人家族も自分たちのことのように喜んでくれた。

バスまでの帰路“Good Game”と声をかけてくれるオランダ人の言葉が心地よかった。

翌日の南アフリカ戦は波に乗った日本が6-2で勝った。結局、2勝3敗で5位という成績だったが、優勝国アメリカに勝ったことで日本の野球をオランダの人々に印象付けられて我々首脳陣も肩の荷が降りる思いだった。

大会を終えて

今回の大会に限らず、国際大会において、強豪国のパワー野球に対して日本の細かな野球がどの程度通用するのかというのは大きな関心事である。我々が直に体験したことによれば、大きくは打者に対しての考え方と投手の投球パターンを考慮する必要があるだろう。日本の打者は各国の打者に比べ、積極性が足りない。ストライク・ゾーンであれば初球から

振って行くキューバ、アメリカの打者に比べると追い込まれるのが早い。このことを投手の方から考えると、積極的に振ってくる打者に対して日本ではボール・ゾーンから攻めることが多いが、いかにストライク・ゾーンで勝負できるかがカギになると感じた。そのためにも振ってくると分かっている打者に対して、ストライク・ゾーンで微妙に球を変化させて、芯を外す投球をすることが必要になるだろう。

また、野球はヨーロッパの人々に受け入れられるのかという疑問に対して、オランダ一国を見ただけなのではっきりとしたことは分からなかった。ただ期間中、地元学生のボランティアに野球はどうだと聞くと、「Bored(あきてくる)」という返答だった。サッカーに比べ動きの少ない野球のあの「間」がヨーロッパの人々にとって受け入れにくいのだろう。しかし、ひとつ言えることとして、野球はサッカーのように国や地域の名譽をかけた「代理戦争」というわけにはいかないのではないか。実際、サッカーの試合では目が血走っている観客が野球ではお祭りに来たように楽しんでいる。サッカーは家族で見ると危険だが、野球は家族で楽しめるというのもハーレムでの野球人気の要因になっていると現地の人たちから聞いた。野球の“プレイ・ボール”という精神のごとく、遊びと友好そして融合というムードの中では国際的に発展するのかもしれない。

最後に滞在中、現地の方々には大変お世話になった。特に在蘭邦人の方々には試合前に「あきたこまち」のおにぎりや味噌汁を頂くことで、選手・コーチ陣は力を与えられた。この場を借りて感謝したい。自分としても今回の経験をぜひとも今後の授業・研究・課外活動に活かしていきたい。